ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

天理教ニューヨークセンター所長
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

コロンビア大学占拠

マンハッタンにあるコロンビア大学では、イスラエルのガザ侵攻を非難する学生による抗議活動が続いている。次第に活動が過激化し、校舎建物を破損して侵入して占拠し、バリケードを築き、窓を割るなど暴動を起こす事態にまで悪化している。4月30日、大学側の要請によってニューヨーク市警が出動して、建物内に立てこもる学生らを強制的に排除し、多くの逮捕者が出た。これらの抗議活動は全米各地の大学に広がっており、これまでに2,000人以上の逮捕者が出ているようで、ベトナム反戦運動以来の全米規模の学生運動になりつつある。

デモに参加しているのは一部の学生である。それ以外の一般の学生からは、キャンパスがロックダウンされているため、図書館や食堂を使えなかったり、授業が休講したり、リモートになったりしているため、高額な授業料に見合う教育が受けられないと不満の声が高まり、授業料の返還などの要求も出ているようだ。5月6月は卒業式のシーズンでもあり、卒業式の開催も危ぶまれている。すでに中止を決めた大学もある。

全米の大学に拡大する反戦活動だが、学生とは無関係のプロの市民活動家が潜入して学生を煽っているとか、外部から資金が流れてプロの活動家を支援しているとの話も聞かれる。ニューヨークのエリック・アダムズ市長は、「若者たちを過激化しようとする動きがある。彼らがそれをやり遂げ、その存在が白日の下にさらされるまで、手をこまねいて待っている気はない」と述べている。コロンビア大学当局は、抗議デモには「外部の扇動者たちが関与しており、彼らが学生たちを訓練した」と警察に伝え、支援を要請したとのことだ。実際に拘束したデモ隊の半数近くが大学とは無関係の外部者だという、警察側の発表もある。そうであれば、プロの活動家に扇動された一般の学生たちが一番の被害者になりうる。この動きがどこまで激しくなるか非常に心配だ。

バイデン大統領は全米各地の大学でのデモについて「抗議する権利はあるが、混乱を引き起こす権利はない」と述べ、キャンパスの占拠などの違法行為を非難した。イスラエルを支援する現政府に対して若者の支持離れが目立ちつつある。今年の大統領選で再対決するトランプ前大統領は、コロンビア大学でデモ隊を強制排除した警察官らを「素晴らしい仕事をした」と称賛。バイデン氏の弱腰な対応が混乱を招いたと批判をしている。この動きは大統領選挙にも影響が出てくるかもしれない。

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

2024年1月10日、ニューヨークセンター初代所長の上原眞雄氏が出直した。享年89歳だった。上原氏は天理大学スペイン語学科を卒業後、1962年にニューヨークに渡った。それは、ちょうど吉田進氏や森下敬吾氏がニューヨークに布教に来たのと同じ頃になる。その頃はブロンクス区にあった吉田氏の自宅に皆集まって月次祭を勤めていた。1971年に吉田氏がハワイ伝道庁庁長としてハワイに行ってからは、集まる場所がなくなり、当時おもだった信者の家庭を毎月順番に廻りながら月次祭を行なっていた。そんな中、同年7月に3代真柱がニューヨークに巡教された。それを契機として集いの場所設置の機運が高まり、翌1972年クィーンズ区にあるアパートに神様をまつり、センターの第一歩となった。その後、上原氏の自宅で神様を預かって月次祭を勤めていた。

文化協会起工式での上原氏

上原氏は1972年にニューヨーク・ジャージー笠岡アメリカ布教所を開設している。1977年に現在のニューヨークセンターが設立された時には、センター初代所長として務めた。布教所長を兼任しながら、センターの運営に携わり、現在のセンターの土台を築いた。渡米以来62年間、長きにわたりニューヨークのお道の先駆的な存在として活躍された。

個人的な思い出としては、ニューヨーク文化協会の設立準備委員として熱心に会議に参加され、文化協会の設立に携わり、設立後も運営に心をかけられたことを思い出す。文化協会では、日本語学校の上級クラスを長い間担当された。読書が好きで、小説などの生教材を時間をかけて準備し、楽しく熱心に教えられた。上級クラスを教えるのは準備も知識も要求されるので、私達スタッフはとても助かっていた。音楽も愛好され、晩年は集めた音源をコンピューターに移したり、アーカイブしたりするのが趣味だった。出直される1年前の頃でもお元気で、毎週のように自分で車を運転してニューヨークセンターに来られていた。センターのスタッフと一緒にコンピューターを調整したり、時には自宅のフェンスを一緒に直したりして、お元気な様子だった。

センターの10周年記念誌に上原氏の手記が掲載されているので、その一部を紹介したい。

「今、こうして思い返してみますと、月次祭を欠かすことなくつとめさせて頂いたことが、今日の、このニューヨークの道に続いていると思います。そして、このニューヨークセンターは本当に自然に出来上がってきたのです。無理することもなく、また、無理を強いられることもなく、より集う人たちは皆、自分の心でこのセンターに参拝にみえる。とても素晴らしいことです。人に言われて来るのではなく、お参りしたくてやってくる。実に素晴らしいことだと思います。」

長きにわたりニューヨークの道の発展の上に尽力されたことに、心より感謝申し上げるとともに、先人の足跡を見つめ直して、ニューヨークセンター50周年の節目に向かってさらに一段と成人の道を歩めるように努力したい。